

二里の松原と虹の松原

～虹の松原と二里の松原の呼び名について～

江戸時代には虹の松原を二里の松原とも呼んでいたようだ。

寛政元年(1789)、幕府巡見使が来唐した時、虹の松原の名称を尋ねられて案内の庄屋は、虹の松原は二里の濱、虹が濱、唐土が原とも呼んでいると答えている。

天保9年(1838)の幕府巡見使にも、『御料御巡見様御案内記』によれば、「先に見える松原は何と申すか」と尋ねられて、「二里の松原とも虹ノ松原とも申し候」と答えている。

また、虹の松原の長さについては、土井氏時代の『巡見手鑑』(唐津藩が出した巡見使の質問に対する模範回答集)に、「虹ノ松原東西1里(約4町)、南北5丁(約550疔)」と記しているの、松原の長さが1里程度であったことは確かかなところであろう。

ではどうして二里の松原と言うようになったのであろうか?

この疑問に答えてくれそうな問答が『寛政元年土屋忠治郎様御駕籠添御答書上帳』の中にある。井手野村大庄屋松尾兵左衛門が答えたものである。

「間もなく二子へ御出に成られた処で、土屋様御駕籠立(休憩)なされたので、私達も休んでいたところお呼びになり、濱崎より水嶋(満島)までの道のりをお聞きになりました。1里4丁程ありますと申し上げたら、濱崎で聞いたところでは2里と申したのにと仰せられたので、よく虹ノ松原のことを聞き違えて二里の松原と申す者もいるので、浜崎で答えた者も、きっと間違えて、2里と申上げたのではないかと思います」と答えている。

兵左衛門の見解を正しいとすれば、全長1里程の松原を二里の松原と言う疑問が氷解するのである。松尾兵左衛門は、後に名護屋組の大庄屋を務める当代きっての博学で知られた庄屋である。この見解は正しいとみていいのではと思う。

◎エピソード・伝承・うんちく など

唐津藩へ来た巡見使：『名古屋家文書』(名古屋政昭家蔵)には、巡見使が制度化される以前の寺沢時代に、唐津藩へ来た巡見使の記録がある。

- 一、寺沢志摩守様御代、御上使様両度御廻り遊ばされ候事
名護屋御城御案内、我等祖父伊右衛門に仰せ付けられ候事
- 一、寺沢兵庫守様御代、一度御廻り遊ばされ候節、名護屋御城御案内、我等祖父伊右衛門に仰せつけられ、首尾よく相勤め申し候事
- 一、両度御廻り遊ばされ候御上使様、御家名書付見失い申し候事

これによれば、寺沢志摩守時代、年代は不明であるが2回、兵庫頭の時1回、計3回の派遣があったことがわかる。

すでに廃城となっていた名護屋城の案内を、名護屋村庄屋の伊右衛門が勤めている。

巡見使が制度化された以降の西国巡見使の派遣については、前記『名古屋家文書』を始め唐津藩の庄屋文書に多くの資料が残存する。これにより唐津へ来た西国巡見使をまとめると次のようである。

(松浦史談会 『末廬國』 第167、169、170、171号山田洋氏資料より)

分野 歴史

地域 唐津・浜玉

◎地図・写真・統計資料など



虹の松原

(田中明氏より)

◎引用・参考文献(出典)

※「自然」の部「虹の松原」を参照

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html